



ロシア啓蒙運動史序説 : デカブリスト(2)

秋元, 春朝

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 4(2):223-237

(Issue Date)

1997-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000253>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000253>



ロシア啓蒙運動史序説

—デカブリスト (2) —

秋元 春朝*

Enlightenment Movement in the Russia

-Decembrists (2)-

Harutomo AKIMOTO

V. デカブリストたち (i) 南方結社

デカブリスト運動の歴史において、1823年から蜂起時の1825年までの時期は、直接に武装決起をめざす準備態勢づくりとむすびつく、積極的な活動期である。おもに軍人からなる新規加盟者のうけいれをつうじて、組織の員数は急速に拡大する。とくに1825年の決起直前の時期に、新規加盟者は集中的に増加する。そして、これら新規の結社員たちは、急進的な傾向をおびるとともに、決起のときの実動力を構成していく。これらの新規加盟者は、すでに、前・早期デカブリストたちとはことなる世代——第2世代のデカブリストたちであった。

この時期におけるデカブリスト組織の活動は、多面にわたる。それらは、憲法草案と武装蜂起計画の作成および検討、南北両結社の統合交渉、デカブリスト組織とは別個に独立して結成された秘密結社との連携工作などであった。それらの活動においては、南方結社側の主導がめざましかった。すなわち、南方結社は、武装蜂起計画を最初に立案し、北方結社との組織統一の交渉の主唱者となり、ポーランド愛国者結社との関係を追究し、統一スラヴ結社をほりおこし、これを自身の秘密結社と合併させる。そして、1825年の夏からは、目前にせまる決起へむけて兵士たちのなかで、集中的な啓蒙活動を展開する。

1821年3月にツリチーンにおいて結成された、南方結社 (Южное общество) の指導部は執行部 (Директория) といわれ、ペーステリ (議長) とユシネーフスキー (監査) にくわえて、非常駐としてペテルブルグ在勤のニキータ・ムラヴィヨフの3名で構成される。この指導部は、結社の構成員にたいしては独裁的な権限をもち、これら3名の執行委員には単独決定権があたえられていた。だが、実際には、南方結社の全権は、ペーステリにゆだねられていた。執行部は、そのままきたるべき決起の司令部であり、ペーステリは、そのさいの先頭にたつ人物として予定される。ついでながら、ペーステリは、その非凡な知性、高度な教育経験と広汎な教養、多面的な才能、論理的な考察力の駆使によって話し相手を魅了する能力の持主という、すぐれた資質をそなえた人物としては、衆目が一致していた、といわれる。

南方結社は、ただちに結社員の拡大を開始する。新規の加盟者の採否は、執行部の同意が必要とされた。ただし、採用の手続は簡単であった。それは、無署名の文書をつうじて、結社の活動に積極的

* 神戸大学発達科学部成人学習論講座

に参加し、かつ秘密をまもる誓約に同意し、このことを表明する、誠実な言葉だけで十分とされた。

組織の拡大にのりだすとともに、結成以来開催の機会をうかがっていた、南方結社の年次大会がもたれる。この第1回南方結社大会は、ウクライナのキエフで、1月6日(1822年)からはじまる洗礼祭にともなう定期市の時期がえらばれた。この期間は街中がお祭り気分になり、軍人たちも各地からやってきて、買い物と休暇をたのしむ慣例になっていた。混雑する街なかでは、政府や警察の疑惑をあまりまねかずに、各種の集会が開催できたのである。

この第1回大会は、大会とはいっても、より正確には南方結社の各本部の幹部たちの総会である。出席者は、ペーステリ、ユシネーフスキー、ウォルコーンスキー・エス・ゲ、ダヴィードフ・ヴェ・エリ、ムラヴィヨフ＝アポートル・エス・イの5名であった。ニキータ・ムラヴィヨフは招待されたにしても、出席していない。

この第1回南方結社大会では、1821年3月のツリチーン本部集会における決議の承認、21年1月のモスクワ代表者大会の決定の拒否、結社執行部3名にたいする全権委譲の確認、軍隊を行使しての革命の変革の準備をめぐる検討などがおこなわれた。そのなかでも、結社の綱領制定が、当面の主要課題にされていた。この課題をめぐるペーステリが、憲法草案の基本的な諸命題を報告する。この草案は、キエフ・ルーシの古典的法典にちなんで1824年に「ルースカヤ・プラウダ」(Русская Правда, ロシア法典)とペーステリ自身によって命名される。このときのペーステリ報告は、農業問題と臨時革命政府の独裁構想にとくべつな注意がはらわれていた。この大会は、ペーステリの草案構想とその実現方法をめぐって、結社の構成員に1年間の検討期間をあたえる決議を採択する。

この決議にもとづいて、南方結社の成員のあいだでは、機会あるごとに活発な対話が展開され、おなじく、この大会のほぼ1年後の1823年初頭までに、結社の組織化もまた、最終段階をむかえる態勢にうつっていく。1821年初頭にペーステリは、政府によって秘密派遣員に指名され、ギリシャの蜂起に関連するモルドヴァおよびヴァラキアの問題をさぐられる。この問題についてのかれのすぐれた報告が、皇帝アレクサンドルI世の賞賛をえる。1821年11月にペーステリは陸軍大佐に進級し、ヴァートカ連隊長に就任する。

1823年は、南方結社が一連の重大な組織問題にとりくんだ時期にあたる。

1823年1月のキエフ定期市の開催時に、南方結社の第2回代議員大会がもたれる。この大会の主要議題は、ペーステリ起草の憲法草案の第一次案の討議・採択であった。それにくわえて、さしせまる革命における秘密組織の行動計画としての、きわめて重要な戦術問題が検討される。このとき、ポーランド愛国者結社(Польское Патриотическое общество)の代表たちが大会において紹介され、南方結社とポーランド愛国者結社との交渉の端緒がひらかれる。ペーステリ提案の行動計画は、蜂起においては南北両結社の共同行動が決定的な役割をはたす、という前提にたっていた。そのために、共通の組織的＝戦術的および綱領的基礎のもとでの両結社の統合が、緊急の課題とされた。ペーステリ自身も、解決へむけて、さっそくこの課題にとりかかる。

おなじく1823年に南方結社は、結社員員の員数の増加にともなって、ツリチーン本部にくわえて2つの本部(управа)を組織する。1つは、ムラヴィヨフ＝アポートル・エス・イ(Муравьев-Апостол, С. И., 1795-1826、陸軍中佐)とベスツージェフ＝リユーミン・エム・ペ(Бестужев-Рюмин, М. П., 1801-1826、陸軍少尉)とを指導者とするワシリコーフスキー本部であり、さらに1つには、ウォルコーンスキー・エス・ゲ(Волконский, С. Г., 1788-1865、公爵、陸軍少将)³⁾とダヴィードフ・ヴェ・エリ(Давыдов, В. Л., 1793-1855、陸軍大佐)が主宰するカーメンスク本部である。

ワシリコーフスキー本部は、この時期の南方結社のなかでは、きわめて活動的な展開をしめす。ムラヴィヨフ＝アポートルとベスツージェフ＝リユーミンの両名を主宰者とする、この本部は、さ

らに限定するならば、ムラヴィヨフ＝アポストルが指導者である。これら両名は、すぐれた人格者として知られ、とくにムラヴィヨフ＝アポストルは、たぐいまれな知性と教養の持主という定評をかかえていた。そして、まさにワシリコフスキー本部の提唱によって、ポーランド愛国者結社との接触がおこなわれ、統一スラヴ結社と南方結社との統合が実現し、さらに1825年におけるチェルニーゴフ連隊の決起をうながしたのである。しかも、これらすべての過程における推進者の役割を、ベスツージェフ＝リューミンが果たした。かれは、卓越した組織能力と雄弁の才をかかえた、ムラヴィヨフ＝アポストルのもっとも親密な友人であり、これらの活動のほか、新規加入者の勧誘にも力をそそぐなど、1823年に南方結社に加盟したばかりにもかかわらず、結社のもっとも活動的な指導者の1人として知られる。

このワシリコフスキー本部が、ペーステリの戦術論とはことなる計画を提起する。かれらワシリコフスキー本部の結社員たちは、北方結社の決意に——南方結社のそれにすら——期待せず、さらに迅速で思いきった行動と戦術をうちだした。すなわち、それによれば、決起は首都で遂行すべきでなく、辺境での皇帝の閲兵式のときを好機とすべきとされる。皇帝を逮捕・殺害し、閲兵式に参列している軍隊を蜂起させるという計画である。そして、1823年から25年にかけて数回にわたる、ワシリコフスキー本部独自の軍事行動計画がこころみられる。だが、決行直前の事態にいたる計画もふくめて、それらのいずれも結果的には遂行できなかった。

ロシア支配下のポーランド領土では、19世紀の初期には、フリーメイソン組織の内部から生成した愛国主義的な組織が、すくなくとも各地につくられる。それらは、ポーランドの民族的復興・国家的自主性の復権をめざす運動を課題にかかっていた。それらの組織の構成員は、学生・官吏・軍人・小貴族・進歩的な傾向の大地主からなっていた。1819年5月にルカシンスキー・ヴェを領袖とする「民族フリーメイソン」という結社が結成される。発足からまもなく、この結社には、ポーランド領土内で47支部・5,000人の結社員が結集したといわれる。(9, c. 145) さらに1821年5月に、これらのフリーメイソン組織は、ワルシャワ郊外でポーランド愛国者結社という政治結社をあらたに発足させた。貴族的色彩をかかえながらも、この結社は、ポーランド独立の復活をみずからの基本的任務に設定した。くわえてそれ以外に、封建秩序の廃絶・共和制体制の確立・農奴の賦役の廃止が、実現計画におりこまれていた。ルカシンスキーは、ロシア本国に政治的密結社があることを確信し、これとの接触を模索する。だが、1822年にルカシンスキーは逮捕され、その後ポーランド愛国者結社の指導は穏健派にうつる。

1823年にポーランド愛国者結社は、南方結社ワシリコフスキー本部の2名の指導者——ムラヴィヨフ＝アポストル・エス・イおよびベスツージェフ＝リューミン・エム・ペ——との接触からはじめて、その後数回にわたる両組織の接触のあと、1年後の24年当初に予備交渉が成立する。この予備交渉において、ロシア側およびポーランド側の責務がそれぞれ提示され、協定へむけて一段階をふみだす。けれども、よく25年の初頭までの折衝にもかかわらず、両結社の主張の一致点を容易にはみいだせないままに、1826年1月まで協議がもちこされることになる。デカブリストとポーランドの革命者との共同行動計画は実現しなかったにしても、両者の接触は、ロシアとポーランドとの統一的な革命同盟の端緒をきりひらくことになる。ただし、この両者の交渉は、北方結社はまったくあずかり知らぬうちにすすめられていた。

南方結社と統一スラヴ結社(Общество соединённых славян)との接触は、思いがけない機会におこなわれる。統一スラヴ結社の一員である、ペンザ歩兵連隊大尉チュートチェフ・ア・イが、その当時ウクライナのジトミール近郊に駐留していたムラヴィヨフ＝アポストルとベスツージェフ＝リューミンをたずねる。この3名は旧知であり、以前にはともにかつてのセミョーノフ連隊に所属していた。かれらの談話のなかで、相互の密結社の存在がひきだされ、これら両結社は統合へむけて作動する。

統一スラヴ結社の発端は、1818年の5月にウクライナのポルターフ県リエシェーチロフカで、当時まだはたちまえの士官候補生ボリーソフ兄弟とウォールコフの3名で組織した、いささか大げさな名称をもつ「結社」である。この結社は、フランス革命期における思想的一派であるピタゴラス信奉グループにちなみ、知識・芸術・徳性・愛・友情における自己の向上を目的にさだめ、そののちさらに倫理性の改善と宗教的偏見の浄化を、それにつけくわえる。その後、この小集団の名称は「自然の友」に変更される。だが、この小集団は、じっさいには、公正な社会を夢みる若者の集まりにすぎず、身近な実践的課題としては、倫理的側面における自己完成をめざすところみでしかなかった。

したがって、厳密な意味では、ボリーソフ兄弟とウォールコフがつくった、この段階での小集団は、政治的秘密結社とはいいがたい。しかし、この小集団は、のちの統一スラヴ結社の基礎となる。さらにいうならば、前デカブリストのサークル、そして早期デカブリスト組織においても、倫理的自己完成と啓蒙活動は、それらの運動の初期にはとくに、前面におしだされていたのである。そしてまた、18世紀以来のロシア啓蒙運動の担い手となる組織形成の発端において、指針としてあげられる行動規範は、なによりも組織の構成員の倫理面における自己および相互の完成化と啓蒙活動の実践であった。

統一スラヴ結社の組織化は、1823年におけるボリーソフ兄弟と、その親類であるリュブリンスキー・ユとの出会いにはじまる。当時ボリーソフ兄弟は、ノヴォグラード＝ウォルィンスクに配置されていた第8砲兵旅団に所属し、そこで学生集会に参加しようとして警察の退去命令を受けた、ワルシャワ大学の学生であるリュブリンスキーとであう。かれらボリーソフ兄弟は、リュブリンスキーと考えかたや思想傾向が接近しているとみて、かれに自分たちのサークルの存在をあかす。リュブリンスキーは、かれらの未熟な夢に痛烈な批判をくわえ、連邦制民主共和国の建設へむけて、スラヴ民族の統一をはかる目的のものと、秘密結社の組織化を提案する。その提案は、ボリーソフ兄弟をはげしくゆるうごかし、統一スラヴ結社が発足する。おなじ23年に、第8砲兵旅団の少尉ゴルバチェーフスキー・イ・イが、これに加盟する。

統一スラヴ結社の設立者たちの構想によれば、予定される全スラヴ連邦は、10の「スラヴ民族」共和国の統合をめざしていた。すなわち、それはロシア・ポーランド・ボヘミア・モラヴィア・ハンガリーおよびトランシルヴァニア・セルビア・モルダヴィア・ヴァラキア・ダルマチア・クロアチアという、10共和国から構成される。この類別にみられるように、ボリーソフ兄弟とリュブリンスキーは、民族的属性についてのとらえかたが不明瞭なままに「スラヴ民族」のなかに、ハンガリー人・ルーマニア人・モルダヴィア人をふくめている。ともかく、これらの共和国は、それぞれ首都をもつべきと予定される。だが、連邦の首都は未定にされていた。

統一スラヴ結社の構成員は、当初はごく少数であり、1824年以前では10名以下であり、25年秋の南方結社との統合のときには、おもに軍人からなる総数50名以上をかかえていたといわれる。(9、c. 155) かれら結社員の大部分は、わずかな領地しかもたない小貴族あるいは無封地貴族出身であり、軍人あるいはしがない官等の職についていた。そのうちのいく人かは、自分のとばしい軍人給与から農奴の身うけ金を捻出していた。

統一スラヴ結社には、十分にねりあげられた綱領はなかった。だが、その政治目的は、リュブリンスキーとピョートル・ボリーソフがまとめた、結社の規約などから知られている。すなわち、統一スラヴ結社の綱領的要求は、農奴制およびあらゆる専制の廃絶、公民の普遍的な平等、信教の自由、経済活動の自由、スラヴ諸民族の民主的な共和国連邦の創設に、帰着する。

1825年の夏の終わりまで、統一スラヴ結社はなんらのめだつ活動をしなかった。多くもない結社の成員が南ウクライナの各地に分散していた状況が、かれらの活動を制約していた。このとき以前の24年12月のはじめに、ボリーソフ・ピョートル・イとゴルバチェーフスキーは、結社活動の促進をめざして組織の再編成にのりだす。25年3月にジトミール郊外のチェルニーコフで結社員の大多数による

集会をもち、規約（その本文はのこされていない）と結社の改組原則が全員一致で採択される。そしてこの集会で、結社の議長（領袖）にポリソフ・ペ・イ、書記に食糧事務所の官吏イワーノフ・イ、副議長にペンザ歩兵連隊中尉グロムニーツキー・ペが選出される。

統合問題をめぐって、南方結社と統一スラヴ結社は、1825年9月3－13日に5回にわたる交渉をかさねる。その結果、統一スラヴ結社は、南方結社の特別な本部の1つとしてくみこまれ、南方結社の綱領と軍事変革という戦術構想をうけいれる。

1825年9月15日にムラヴィヨフ＝アポーストル・エスは、統一スラヴ結社のスピリードフ・エム（ペンザ歩兵連隊少佐）、ゴルバチューフスキー、ペーストフ・ア・エス（少尉）をまねき、兵士たちへのはたらきかけについて協議する。このとき、ムラヴィヨフ＝アポーストルは、宗教の利用が効果的であるとみて、聖書の一部をよみあげ、聞かせる方式を提案する。つまり、聖書にしめされる宗旨によれば、皇帝をえらび、それに服従する行為を、神があからさまに禁止している部分がある。この神の指示をわかりやすく兵士たちに知らせ、それまでの固定観念をくずし、皇帝にたいして武器をとってたちあがらせる、という着想である。この観念くずしは、大部分が教育経験がない、農奴農民出身である兵士大衆に手がとどく啓蒙方式であった。ムラヴィヨフ＝アポーストルはベスツージェフ＝リュエミンとともに、自身の着想の具体化をはかり、兵士大衆のなかで活用されるべき、反皇帝啓発用の「正教教理問答書」を作成する。この「正教教理問答書」は、そのあとのチェルニーゴフ連隊の決起のときにじっさいに使用される。この9月15日の会合のときに、アレクサーンドルⅠ世を暗殺する15名からなる別動隊が組織され、そのうち12名を統一スラヴ結社がひきうける。

デカブリスト組織である南方結社と北方結社は、福祉同盟を母体にするとはいえ、これらは福祉同盟とはまったくことなる組織と戦術をかかえる結社である。しかも、これらの2結社は、完全に自立した、いずれにも従属しない、基本的にことなる綱領をそれぞれかけざる組織である。だが、南方結社の指導部は、南北両結社の結成まもなくから、これらの統合を期待していた。1823年に南方結社——とくにペーステリとユシネーフスキー——からののはたらきかけによって、南北両結社の統合折衝が本格的におこなわれる。北方結社では、ムラヴィヨフ（・ニキータ）を中心にする穏健派も、リュレーエフを中軸にかかえる急進派も、臨時革命政府の独裁・農地の配分などの問題をめぐって、ペーステリ構想には否定的であった。

1823年の初頭から、南方結社は特使を北方結社へ派遣して交渉にあたらせ、24年の3月から4月にかけてはペーステリ自身が、「ルースカヤ・ブラウダ」の手稿をたずさえてペテルブルグにむかう。ペーステリは、この期間にオボレーンスキー・イエ・ペ、ツルベツコーイ・エス・ペ、リュレーエフ、ムラヴィヨフ・エヌなど10名の北方結社の指導層と会談する。これらの会談は、のちに、いわゆるペテルブルグ協議会といわれる。

だが、ペーステリの努力にもかかわらず、南北両結社の統合問題は、1826年まで2年間もちこされる。結果的には南北両結社の統合は成功しなかったにせよ、このペテルブルグ協議会は、統合を大きく前進させる。ペーステリは、北方結社の動向をつうじて、リュレーエフを中心にする、その急進派の活動性に注目していた。ペテルブルグにおけるペーステリとリュレーエフの出会い、ペーステリ構想をうけいれはしなかったものの、リュレーエフはペーステリから大きな影響をうけることになる。このときリュレーエフは、ペーステリの共和制案を、ロシア社会の現実ではそれを成立させる条件が未成熟であり、時機尚早とみて、立憲君主制を主張していた。

1824年のはじめごろから、南方結社ワシリコーフスキー本部の指導部は、独自に北方結社との連携をこころみる。北方のツルベツコーイとその同調者たちは、ペーステリにたいする牽制の機会とみて、ワシリコーフスキー本部——とくにムラヴィヨフ＝アポーストル・エス・イ——と積極的に接触す

る。24年12月にツルベツコーイは、それまでの軍団本部上級副官との兼務として、キエフの第4歩兵軍団の当直佐官に任命される。この兼務転勤によって、ツルベツコーイは首都ペテルブルグとキエフとの往復がいつでもできるようになり、南北両結社の連絡がそれ以前よりはとりやすくなる。その後、ツルベツコーイの橋渡しをつうじて、南北両結社は1825年11月に、具体的な共同行動をめぐる合意にいきつく。決起の時期は、1826年5月のアレクサーンドルⅠ世による第3および第4歩兵軍団の夏期閱兵式の当日と定められる。

蜂起を目前にひかえた1824-25年の時期において、デカプリストがとりくむべき最大の課題は、兵士たちの行動の組織化であった。軍隊におけるデカプリストは、そのほとんどが将校であり、かれらの指導・統率のもとに兵士たちが決起しなくては軍事蜂起は成立しない。そのためには、事前に兵士たちにたいする啓蒙活動をすすめておかななくてはならない。このような啓蒙は、デカプリスト運動においては、その内容と方式はおなじでないにしても、すでにラエーフスキー・ヴェ・エフやオホートニコフ・デ・アなどによる、福祉同盟キシニョーフ組織での活動の経験がある。

南方結社では、フォフト・イ・エフ（1794-1842、二等大尉）の提案にもとづき、兵士たちを「告知者」（гласных）と「未告知者」（негласных）とに区分して啓蒙活動を展開した。「告知者」は、ほかの兵士たちにたいする威信をもち、かつ結社員である将校の信頼をえた老練な兵士たちである。「未告知者」は、それ以外の兵士大衆をさし、「告知者」をつうじての啓蒙によって啓発される対象となる。デカプリストたちは、まずこれらの老練兵にはたらきかけ、むすびつく努力から着手する。すなわち、日常では良好な態度をたもち、兵士たちの状態について話しかけ、兵役の過酷な条件をなくしたいと考えている人間も将校のなかにいるとつたえる。かれらデカプリスト将校たちは、体罰の廃止、兵士にたいする人間的な取扱いの必要、物質的状态の改善、兵役期間の短縮など、兵士たちの過酷な服務条件をめぐる対話のなかで、解放へむけての啓蒙の下地をつくっていく。しかし、そのさい、兵士たちに決起計画をうちあける場合はなく、政治的な内容はむしろさける努力をしていた。

軍隊内における兵士たちにたいする啓蒙活動は、信頼するにたりる「告知者」である下士官兵をつうじておこなわれた。それらの下士官兵のなかでも、とくに1820年の反乱をまねいたセミヨーノフ連隊から、第一（とくにその第三歩兵兵団）および第二軍団にその解体後に編入された前セミヨーノフ連隊所属の下士官たちが、兵士たちにはたらきかける。かれら前セミヨーノフ連隊兵士たちは、専制側からの報復として終身兵役の状態におかれ、危険な国事犯とみなされて、上官側からのありとあらゆる迫害をうけ、容赦ない刑罰を課された不公正をふかく心にきざみつけていた。このような重圧状況におかれた兵士たちは、デカプリスト将校にたいして共感をいだいていく。かれら前セミヨーノフ連隊兵士のなかには、ナポレオン戦争時の英雄をくわえた、実力ある古参兵たちもふくまれていた。それにくわえて、兵士たちにはたらきかける南方結社のデカプリストのなかに、前セミヨーノフ連隊の兵士たちと顔なじみで、1820年の反乱のまきぞえを多少とも食わされた将校たちがいた。南方結社の有力な指導者であるムラヴィヨーフ＝アポストル・エス、ベスツージェフ＝リュミン・エム、チュートチェフ・エム・エムが、それらである。これらをふくむデカプリスト将校は、前セミヨーノフ連隊の兵士たちと交流し、啓発につとめ、かれら兵士たちとの信頼をつみかさねていく。

一方において、統一スラヴ結社でも兵士たちのあいだで、活発な啓蒙活動が展開される。それらの圏内は、この結社の成員の大部分が所属するチェルニーゴフ・サラートフ・ペンザの3歩兵連隊、第八および第九砲兵旅団である。

VI. デカブリストたち (ii) 北方結社

1821年の初頭における福祉同盟のモスクワ大会による「解散」のあと、北方においてのろい足どりのままに再建をひかえた組織の指導には、ニキータを中心にしてツルベツコーイ（公爵・大佐）とオボレーンスキー（公爵・副官）があたり、あらたにナルイシキン・エム、セミョーノフ・エス、ミチーコフ・エム、トルストイ・ヤをひきいれる。ツルゲーネフは、このときの当初には会合にあまり顔をださなかった。そして、1821年の3月から4月にかけて、その後北方結社に成長する、細胞の会合が数回もたれる。だが、近衛軍をふくめたロシア軍隊は、イタリア革命にたいする干涉戦争に参加する、アレクサンドルⅠ世の遠征にかりだされる。そのために、結社の形成は中断されざるをえなくなる。けれども、欧州におけるロシアの勢力の増大をおそれた欧州列強のたくみな牽制にあって、ロシア軍はこの干涉戦争での役割をはずされる。イタリア革命はオーストリア軍に鎮圧され、1822年の秋にロシア軍そして近衛連隊はペテルブルグに帰還する。このあとに、ニコラーイ・ツルゲーネフとニキータ・ムラヴィヨフの両グループを基盤にする北方結社（Северное общество）は、1822年11月によりやく結成される。

北方結社は、発足当時は10名をこえない小人数の構成員から出発した。組織の拡大をめざすなかで、構成員は2階級の区別がもうけられた。その1つは、組織の秘めた目的に熟知し、新規の加盟者を採用する権限をもつ「確信者」（убеждённых）であり、ほかの1つは、「賛同者」（согласных）あるいは「連帯者」（соединённых）と一括される、その他の構成員である。結社の最高機関として（北方）会議（дума）がもうけられ、ムラヴィヨフ（・ニキータ）、ツルゲーネフ、ツルベツコーイの3名が、これを構成した。だが、じっさいには1823年まで、ニキータが主導していた。この秘密結社の「確信者」からなる上層部は、下級部の「連帯者」のなかから、その活動の程度におうじて補充された。新規の加盟者は、自分を勧誘した人物以外の結社員を知らされなかった。

ニキータとペーステリは、連絡をとりあい、2つの結社をめぐる課題の共通性と同時行動の必要性を追究していた。この2人は、2つの結社を1つの結社とみなし、結社員が南部に転属する場合には南方結社に、北部に移籍する場合には北方結社に所属する方式をとった。

福祉同盟からの再出発にふみだした北方結社は、しかしながら、1821年から23年までは不活発で生彩にかけた時期をすごす。結社の員数は容易には拡大しなく、しかも脱退者がでるしまつであった。結社員が所属する近衛連隊の1年以上にわたる遠征、国内移動のために、時間的・活力的に余裕がみいだせないままに、組織の強化と活動の展開を停滞させていた。けれども、この停滞の主因は、それ以前の福祉同盟の時期からみられたように、ペテルブルグの結社員たちが一般に穏健派であり、それなりに行動においては積極性にとぼしく、にえきらない態度の持主たちだったからである。そして、ほとんど活動不能で自滅にさしかかっていた1823年に、詩人として知られるリュレーエフ・カ・エフ（Рылеев, К. Ф., 1795—1826）の加盟によって、北方結社の活動に生氣がふきこまれる。

すでにその加盟以前に、デカブリストの小集団内部では、リュレーエフは勇敢な詩人・正義の味方として知られていた。1821年のはじめごろにリュレーエフは軍務をしりぞき（退役陸軍少尉）、ペテルブルグに移住し、すぐにそこでの文学サークルに加入する。同年にペテルブルグ郡の貴族層によって、ペテルブルグ刑事院の代表委員に選出される。おくれたロシア社会の現実直面して、数々の挫折をあじわされながらも、かれは1824年までこの仕事をつづけ、被抑圧者の擁護者という名声をえる。

1823年の初頭に、リュレーエフは古くからのデカブリストであるプーシチン・イ・イ（Пушкин, И. И., 1798—1859）と知りあう。プーシチンは、かれなりの信念にもとづいて軍務をしりぞき、ペテルブルグ刑事院に転職し、ここでリュレーエフとであうことになる。プーシチンはリュレーエフを熟知し、いささかのためらいもなくかれを秘密結社にむかえいれる。しかも、新規の加盟者は、2階級制

をとる結社の下級部の「連帯者」あるいは「賛同者」に当初は所属する組織方式にもかかわらず、かれは、いきなり組織の上層部である「確信者」にリュレーエフをくみこむ。「確信者」には、新規の加盟者の採用権があたえられる。リュレーエフは、この権能を巾広く活用する。すなわち、その後にリュレーエフ支部 (отрасль) といわれ、北方結社の急進派の核となる、若い精力的な将校たちを、かれはすくなく北方結社に加盟させたのである。北方結社におけるリュレーエフとかれの「支部」の活動に注目した南方結社の領袖ベーステリは、南北両結社の合同・統合の期待を、すでに1823年のうちにかれらリュレーエフたちにたくしていた。

1824-25年に北方結社の活動は、活発になる。23年に北方結社の活動分子の要求によって、指導者 (правители) の3人制がとられる。それによって、ムラヴィヨフ (・ニキータ) のほかにツルベツコーイとオボレーンスキーが指導者にくわわる。ツルベツコーイのキエフ兼任にともない、リュレーエフがそれにかかわって指導者の立場をしめる。さらにニキータは、22年に議会 (дума) の議員に選出されて以来、自分の領地にひきこみがちになる。そして、北方結社の指導的立場は、リュレーエフ「支部」がなう状況になる。この「支部」は、近衛隊および海軍の若い将校たち、文筆者、退役将校たちからなる、リュレーエフの共鳴者の集団であった。すなわち、それらは、おもにリュレーエフ自身が結社に勧誘したキュヘリベーケル・ヴェ・カ (Кюхельбекер, В. К., 1797-1846, 8等文官)、オドーエフスキー・ア・イ (Одоевский, А. И., 1802-39, 公爵、近衛騎兵少尉)、カホーフスキー・ペ・ゲ (Каховский, К. П., 1799-1826, 退役陸軍中尉)、トルソン・カ・ペ (Торсон, К. П., 1793-1851, 海軍大尉)、アルブゾフ・ア・ペ (Арбузов, А. П., 1797または1798-1843, 近衛海兵大尉)、ザワリーシン・デ・イ (Завалишин, Л. И., 1804-1892, 海兵大尉)、ベリヤーエフ兄弟 (Беляевы, А. П. и П. П.), ベスツージェフ3兄弟 (Бестужевы А. А., М. А. и Н. А.) たちであり、リュレーエフを結社にうけいれた旧世代のデカбриストたち——プーシチン・イ・イ、オボレーンスキー・イエ・ペ、シティーンゲリ・ヴェ・イ——もまた、かれの共鳴者であった。これらリュレーエフ派の結社員たちが、1825年12月14日の軍事決起の主力動因となる。

1824年までに、北方結社におけるリュレーエフの指導的立場および役割は確定する。この時点から、きたるべき決定的行動にそなえて、北方結社は各種の近衛連隊の将校たちを「多数」加盟させる。すなわち、それらの連隊は、てき弾兵連隊・イズマーイロフ連隊などである。そのなかには、近衛海兵隊の将校もふくまれる。

1824年12月末に、その当時モスクワ貴族地方裁判所に転属していた、プーシチンがペテルブルグにおとずれ、リュレーエフとオボレーンスキーとの数回の会談をもち、結社のモスクワ本部へのでこいれをはかる。このころ、かつての有力な結社員であったオルローフ・エム・エフ、フォンヴィーズイン・イ・アおよびエム・ア兄弟は結社活動からはなれ、ヤクーシキン・イ・デは自分の出身地にひきこんでいた。その他の結社員の活動もみられず、北方結社モスクワ本部の活動は低迷していた。

プーシチンはモスクワにもどるとともに、モスクワ本部の再建にとりかかる。25年1月末にオボレーンスキーが、28日間の休暇をとってモスクワをおとずれる。その2月はじめに、オボレーンスキーの居室で再建会議がひらかれ、プーシチンを代表とする北方結社の再生モスクワ本部が発足する。この協議会の参加者は、カーシキン・エス・エヌ (Кашкин, С. Н., 1799-1868, 県書記官、オボレーンスキーのいとこ)、ツチコーフ・ア・ア (Тучков, А. А., 1800-78, 退役陸軍少尉・侍従武官)、ゴールストキン・イ・エヌ (Горсткий, И. Н., 1798-1876, 9等文官)、ナルイーシキン・エム・エム (Нарышкин, М. М., 1798-1863, 陸軍大佐・連隊長)、セミョーノフ・ア・ヴェ (Семёнов, А. В., 1799-1864, 退役陸軍大尉)、コローシン・ペ・イ (Колошин, П. И., 1799-1854, 9等文官)、そしてプーシチンである。しかし、福祉同盟いらいの旧デカбриストであるフォンヴィーズイン兄弟、オルローフ・エム・エフは、この再建モスクワ本部には参加しなかった。首都ペテルブルグでの結社

の場合とおなじように、モスクワでも古参の結社員はすでに結社活動には消極的であった。北方結社は、新規の加盟者——ほんらいのデカブリストたち——を中心の担い手とする活動状況に移行していた。モスクワ本部は、このあとにすこしずつ加盟者をふやす。それとともに、ペテルブルグ本部からのてこいれが、決起直前までひきつづいておこなわれる。

VII. 武装決起とその瓦解

デカブリストが革命的変革の準備をととのえている時期に、専制はこれにたいする攻撃の手をあげていた。専制政府は、セミョーノフ連隊の反乱、そして密告による秘密結社福祉同盟の存在という事件のほとぼりからさめないままに、このような反専制的な社会的動向にむけての対策をうちだす。

1822年8月1日に、専制政府は、秘密結社およびフリーメイソン組織の禁止令を公布し、軍官・文官にたいしては、以後このような組織に所属しないという誓約書をいれさせ、近衛軍とそれ以外の軍隊の内部に強化された秘密警察の組織網を配置する。秘密警察の探索は、信書の開封検閲・聞きこみ・密告など手段をえらばず、また大臣をふくむ政府高官でも嫌疑の対象になるほど、対象をえらばなかった。アレクサンデルⅠ世は、福祉同盟の解散(1821年)以後における、秘密結社の存在とそれにかかわりのありそうな高官については知っていた。けれども、秘密結社をめぐる具体的な情報は、未確認にとどまっていた。

1825年のはじめごろに、南方屯田兵の下士官シェールヴド・イ・ヴェが友人をつうじて南方結社員陸軍准尉ワドコーフスキー・エフ・エフと知りあう。シェールヴドが屯田兵であり、その駐屯地で顔がひろいという自負にふれたワドコーフスキーは、軽率にも秘密結社への加盟をすすめる。シェールヴドはむしろ自分からすすんで、その勧誘をうけいれる。だが、その3月にシェールヴドは、ペテルブルグの知りあいの侍医あてにアレクサンデルⅠ世への直訴願をとどける。その7月にアラクチュエフが、この密告者と事前に面接し、そのあとにアレクサンデルが謁見する。シェールヴドは、その後も南方結社についての密告をアラクチュエフにとどける。そのようにして、南方結社の指導者がペーステリであること、綱領文書「ルースカヤ・ブラウダ」の存在、軍事行動の準備などの機密が、専制に売りわたされていく。

秘密結社をめぐるアラクチュエフの報告が、当時アゾフ海ぞいのタガンローグで重病にふせていたアレクサンデルにとどけられる。皇帝は、その11月10日に側近の総司令部長官ディービチ・イ・イにたいして、ワドコーフスキーとその「共謀者たち」を逮捕するために、この種の捜査に手なれた近衛コサック連隊長ニコラーエフ・エス・エフの派遣を指令する。そして、この指令は、アレクサンデルⅠ世による発令としては、最後の指令となる。ニコラーエフは11月13日にハリコフに到着し、シェールヴドと面談する。ニコラーエフは、それまでのシェールヴドによる密告情報では逮捕には不十分であると判断し、ワドコーフスキーをしばらく泳がす方針をとる。かれニコラーエフは、文書証拠を必要としていた。その機会はまもなくおとずれる。その12月3日に、軽薄なワドコーフスキーは、自分で書いたペーステリあての重要な機密文書をシェールヴドに手わたす。ひとりよがりのワドコーフスキーの、この書簡には結社のおきてをやぶって結社の構想・計画がのべられ、くわえて結社の構成員の氏名——グラube・ペ・ハ、オルローフ・エム・エフ、ツルベツコーイ・エス・ペ、バリャチンスキー・ア・ペ、ムラヴィヨフ＝アポートル・エム・イおよびエス・イ——も列挙されていた。この書簡を手にしたニコラーエフは、12月8日にタガンローグでディービチと会談し、ペーステリたちの逮捕にふみきる。

くわえて、ディービチの手もとには、このときまでに結社をめぐってべつの2人からの密告がとどいていた。その1人は、南方屯田兵長官ヴィート・イ・オの秘密諜報員である、ウクライナの地主ボ

シニャーク・ア・カである。この男は、25年の春に南方結社の屯田兵少尉リハリョーフ・ヴェ・エヌに接近して秘密結社の存在を知り、ひきつづいてカーメンスク本部の指導者ダヴィードフ・ヴェ・エリとも面識をもつ。ボシニャークとリハリョーフおよびダヴィードフとの関係は、25年の10月にうちきられる。だが、それ以前の8月に、ディービチはボシニャークの報告をうけていた。もう1人は、ヴァトカ歩兵連隊第一てき弾兵中隊長大尉マイボロダー・ア・イである。この男は、当初にはペーステリに勤勉さを買われ、24年8月に結社への加盟がみとめられ、ペーステリ自身の側近に配置されていた。しかし、25年秋にペーステリは、マイボロダーのスパイ行動に気づくようになり、くわえて、この男は第一てき弾兵中隊の公金を横領する。ペーステリの叱責をうけたこの男は、横領金の返済のための金策という口実のもとに連隊をぬけだし、その11月25日にジトミール滞在の第三歩兵軍団長中将ロート・エリ・オに、46名の南北両結社の結社員名簿とともに、秘密結社を密告する。これらの密告は、12月1日にタガンログにひかえたディービチにとどけられる。

1825年12月4日にディービチは、これら3名の密告者からの諜報を基礎資料にして、秘密結社をめぐる詳細な報告書をアレクサードルⅠ世の次弟でワルシャワにいるコンスタンチーンと、ペテルブルグにいるそのまた弟のニコライ・パーヴロウィチにとどける。アレクサードルは、すでにこのとき以前の11月19日に死亡していた。この報告は、ワルシャワには12月11日、ペテルブルグには12月12日に到着する。よく12月5日にディービチは、將軍チェルヌイシヨフをつリチーンに派遣し、ペーステリ、ユシネーフスキーなど密告にもられた南方結社員を逮捕させる。南方結社では、スパイの組織への侵入を察知して、かれらにたいする逮捕の開始とともに、ただちに決起行動にたちあがる手はずを決定していた。しかしながら、多くの不備な条件をかかえたままに、決起は、ペーステリたちの逮捕後の2週間あともちこされる。

1826年の夏に決起行動をめざしていたデカブリストは、25年11月19日のタガンログでのアレクサードルの予期せぬ死亡と、南方結社にたいする専制側からの攻撃とによって計画がくわされ、早急な蜂起の必要にかられることになる。一方、専制側は、帝位の空白期間をむかえる。

1801年に帝位についたアレクサードルには、2人の娘がいた。だが、この両名は死亡し、ほかにも子どもはいなかった。次弟のコンスタンチーンは、妻アンナとは事実上は離婚していて、子どもはいなかった。1818年に三男のニコライに男子が出生する。アレクサードルはそのよく年19年の夏に、自分のあとの帝位の委譲をニコライに予告する。しかし、ニコライは、軍隊をふくめて一般に人望にとばしい男であった。1820年3月に、コンスタンチーンの離婚が布告される。この布告には、つぎのような秘密の追加決定がそえられていた。すなわち、それは、皇帝の家族が世襲的な土地の領有権をもたない者と婚姻する場合には、皇帝の家族に所属する権利はその者にあたえられず、その婚姻関係から出生する子どもは帝位継承権をもたない、という内容である。アレクサードルは、この趣旨をもちこむ特別な法令の作成を手配し、秘密文書としてアレクサードルの遺書にした。この布告は3部作成され、それぞれ元老院・宗務院・國務院に秘密に保管される。しかしながら、この布告にもられた趣旨は、それ以前にコンスタンチーンにアレクサードルが警告していた内容であった。それにもかかわらず、あるいはそれを承知のうえで、コンスタンチーンは、ポーランドのあまり裕福でない地主貴族の娘ヨアンナ・グルジンスカヤと1820年5月に再婚——貴賤相婚——する。ともかく、アレクサードルの遺書としての秘密布告は、その作成の事実すらコンスタンチーンにもニコライにも知らされなかった。したがって、コンスタンチーン自身をのぞいては、アレクサードルの後継者は順位としてコンスタンチーンであると、だれからもみなされていた。1825年11月27日にニコライはじめ帝政の重臣が列席した、冬宮でのアレクサードルの健康回復の祈念式の最中に、アレクサードルの死亡をつげる急使が到着する。一方、コンスタンチーンは、11月25日にアレクサードルの死亡通知をうけとる。かれコンスタンチーンは、キエフの軍人たちを集合させ、死せる兄との約束に

したが、帝位継承権を放棄したと表明する。

アレクサンデルの計報によって、北方結社もまた緊急事態に直面する。ペテルブルグでは、当地における結社の構成員数が比較的すくない条件もあって、比較的に多数の結社員をかかえる南方結社が決起の口火をきり、ペテルブルグとモスクワの両結社本部は、南方の決起を支持するかたちで蜂起する段取りを期待していた。25年11月10日にキエフからペテルブルグにもどっていたツルベツコイは、アレクサンデルの計報がとどいた11月27日の夜にリュレーエフにかけつける。おなじく北方結社の指導部——オボレンスキー、ベスツージェフ・ア・ア、プーシチン——もかけつけ、決起行動の計画を検討する。このときから、リュレーエフの住居は決起本部に変容し、協議は毎日おこなわれる。この協議はツルベツコイが主導し、数回リュレーエフ宅をおとずれて情報と助言をあたえる。リュレーエフ自身は、このとき病身であり、外出できない状態におかれていた。

12月10日に、リュレーエフの住居で2つの実施計画が検討される。1つは、ツルベツコイ案である。それは、武装決起ではなく、武装した軍隊による流血をみない示威行進をつうじて専制に憲政を受諾させる、という計画である。だが、ツルベツコイ案は支持がえられず、もう1つのリュレーエフとプーシチン案が採用される。すなわち、それは、新皇帝にたいする宣誓式が開始される早朝に、宣誓式に出動しない軍隊を元老院広場に導入し、元老院にたいして臨時革命政府の樹立および最高会議の召集の布告を公示させる計画である。デカブリストは、革命の変革に「適法的」形態を付与するいみで、古くからの国家装置のうちでもっとも権威ある機関としての元老院の利用を考えていた。けれども、ニコライにたいする宣誓式は、元老院ではなく、冬宮で挙行される。ともかく、武装決起という、この実行計画の軍司令官となる「独裁者」(Диктатор)には、救済同盟からひきつづく結社員で最古参のツルベツコイがおされる。担い手が第2世代に移行した北方結社では、かれツルベツコイとブラトフ・ア・エム(Булатов, А. М., 1793—1826、陸軍大佐・連隊長)とをのぞいたほかの結社員は、若い世代のデカブリストであり、中隊長までの指揮経験しか統率経験をもっていなかった。ツルベツコイは、参謀長にオボレンスキー・イエ・ペ(Оболенский, Е. П., 1796—1865、近衛連隊中尉)を指名する。このときツルベツコイは、軍事蜂起は成功せずに瓦解する、とすでにみていた。そしてまたリュレーエフも、成功するとはみていなかった。ただし、リュレーエフは、範はのこるとみなし、祖国の未来の自由のためにわが身を犠牲にする覚悟であった、といわれる。

12月12日にニコライは、タガンローグからの南方結社の陰謀をめぐる報告と、北方結社に加盟してまもない近衛狙撃兵連隊少尉ロストフツェフ・ヤ・イからの、北方結社の軍事決起計画をめぐる密告を手にする。これらの情報によってニコライは、軍隊・元老院・宗務院・國務院の宣誓をうけて早急に帝位につく事態にせまられ、宣誓式の日程が12月14日に設定される。この宣誓式の開催日は、政府の極秘事項であった。だが、法典編さんで知られるスペランスキー・エム・エムをつうじて知った、結社員である元老院議員クラスノクーツキー・エス・ゲから、北方結社も13日夜にその日程を知ることになる。当日にそなえての、デカブリストの宣言書「ロシア人民への布告」が用意される。

12月13日の深夜から14日の未明にかけて、新皇帝をさだめる宣誓式のために、元老院・宗務院・國務院の議員・高官たちが冬宮に召集され、14日早朝5時に近衛軍の全将軍と連隊指揮官が集合する。かれらの面前でニコライは、布告・アレクサンデルの遺言状・帝位放棄を表明するコンスタンチンの複数の書簡をよみあげ、軍にむかって自分にたいする宣誓を命じた。

12月14日の朝9時にリュレーエフの住居から、アレクサンデル・ベスツージェフ(1797—1837、二等大尉)はモスクワ連隊へむかう。かれは弟のミハイール・ベスツージェフ(1800—71、二等大尉)、シチューピン＝ロストフスキー・デ・ア(1798—1858、二等大尉)、ブローケ・ア・ア(1802—71、陸軍中尉)、ウォールコフ・ヴェ・エフという、結社員である中隊長たちとの共同行動をめざしていた。このときのモスクワ連隊は、宣誓へむけて準備をすすめていた。アレクサンデル・ベスツージェ

フは、各中隊の兵士たちに、コンスタンチーンへの宣誓をよびかける。かれは自分をコンスタンチーンの副官と呼称し、コンスタンチーンが末弟ミハイールとともに、ワルシャワからペテルブルグにむかう途中にさえぎられ、抑留状態におかれているかのような演説をうつ。一刻をあらそう緊急事態のなかで兵士たちをうごかすために、ここでのデカブリストはニコライにたいする不信任・不人気を利用した。兵士たちの声が、いたるところでひびいた。「ニコライはいらない。コンスタンチーン、ばんざい！」そして、ミハイール・ベスツージェフおよびシチューピン＝ロストフスキーの指揮下の総数800名(一説には700名)の2中隊は、元老院広場にむかい、午前11時までにそこに集結する。

ペテルブルグ統監ミロラドウィチは、副官バシュツキー・ア・エリとともに元老院広場に馬でかけつけ、集結した兵士たちに、コンスタンチーン自身が帝位継承権を放棄したことを表明し、ニコライにたいする宣誓の適法性を説得しようところみる。兵士大衆のなかにいささかの動揺がひきおこされたのをみた、オボレンスキーとカホーフスキーは、非常手段にうったえる。兵士の小銃をとってオボレンスキーは、ミロラドウィチに退去をせまる。ミロラドウィチがそれを拒否すると、かれはその大腿とわき腹に銃剣傷をおわす。それにつづいて、カホーフスキーは短銃を発射する。ミロラドウィチは、致命傷をうける。

ニコライの指令によって元老院広場には、しだいに政府軍が集結してくる。そして、元老院広場は、9,000名の歩兵隊と3,000名の騎兵隊からなる政府軍によって、完全に包囲されてしまう。決起したモスクワ連隊は単独でかなり長いあいだ、元老院広場でたちつくす。その日の午後2時ごろに、周囲の政府軍を突破してスートゴフ・ア・エヌ(1801-72、陸軍中尉)がひきいる近衛てき弾兵連隊中隊とベスツージェフ・エヌ・ア(1791-1855、海軍大尉)とアルブーゾフ・ア・ペ(1797あるいは1798-1843、近衛海兵大尉)が先導する近衛海兵隊1,100名の兵士たちが到着する。また、その途中で冬宮のまえをすすみながらも、そこを通りすぎて、パーノフ・エヌ・ア(1803-1850、陸軍中尉)が指揮をとる5箇編隊からなるてき弾中隊が、政府軍の包囲を突破して合流する。しかしながら、「独裁者」であるツルベツコイは、ついに広場に姿をあらわさなかった。急遽の策として、オボレンスキーが指揮官にえられる。だが、戦術と統率の混乱はさけられなかった。

12月13日の夜から14日の朝にかけて、本部としてのルイレーエフの住居から、「参謀」たちは決起のよびかけに奔走する。しかし、元老院広場に集結した軍隊以外は、期待をかける軍隊との接触がとれなかったり、結社員から拒絶されたりして、それ以上の軍隊の動員はできなかった。ルイレーエフの住居である「本部」で作成された決起計画は、そのはじめから崩壊しかけていた。

それまで小ぜりあいがあったにしても、決起軍と政府軍の両軍は、対峙をつづける。夕やみがせまり、専制側は暗やみが不利になるとみて、大粒散弾砲の一斉射撃にふみきる。決起軍は、混乱のうちに敗退し、北方結社による軍事蜂起は瓦解する。

南方結社は、アレクサードルの死をワルシャワやペテルブルグに伝達されるよりもはや知っていた。それとともに、秘密結社をめぐる密告についても、知るところとなる。このような状況にあって、南北両結社の統一行動は不可能になり、ペーステリは南方結社の単独行動の決定にもちこむ。ペーステリを司令官とするヴァートカ連隊は、1826年元旦にツリチーンの第二軍団本部で警備にあたる予定になっていた。このときを利用して、決起行動の開始が計画される。しかしながら、ペーステリとユシネーフスキーは12月13日に、密告にもとづいた軍当局によってツリチーンで逮捕され、ツリチーン本部は指導部をうしなう。カーメンスク本部は決起の先導はとれなく、のこされた期待はワシリコーフスキー本部にかけるほかなかった。この指導者は、ゼルゲイ・ムラヴィヨーフ＝アポーストルとミハイール・ベスツージェフ＝リユーミンである。

この当時、ベスツージェフ＝リユーミンは母の死をむかえる。かれは父と会うため、まずモスクワ

におもむき、その後ペテルブルグにまわって北方結社の指導部と会合する予定であった。しかし、12月25日にジトミールに到着したとき、かれは12月14日の北方結社による蜂起事件を知り、旅行のいみをうしなってしまう。このあと、ムラヴィヨフ＝アポーストルとベスツージェフ＝リューミンは、各地の南方結社の構成員たちに足をはこび、決起をよびかける。けれども、状況判断の相違・個人的理由・逃避・背信などの要因によって、ほとんど協力者をみいだせないままに北方結社の決起のときに類似した、きびしい状況にせまられる。すでに、決起のよびかけの旅行中に、この両名には逮捕命令がくだされ、ムラヴィヨフ＝アポーストルは弟のマトヴェイとともに一度逮捕されたあと救出される。救出された、これらの兄弟は、チェルニーゴフ連隊の決起にとりかかる。

ムラヴィヨフ＝アポーストルは、ワシリコーフにチェルニーゴフ連隊の全中隊を集結させ、そこに「本部」を設置する計画であった。1825年12月29日に、かれは、まずクズィミンの中隊をコワレフカにむかわせ、さらに自身の中隊をソロヴィヨフとシチェピーロにあずけて、チェルニーゴフ連隊の3中隊が駐屯している、ワシリコーフにさしむける。クズィミンがひきいる中隊とともに、ムラヴィヨフ＝アポーストルは12月29日の夕方コワレフカに到着し、そのつぎの朝から吹雪のなかの約26キロ半の距離を6時間で強行してワシリコーフに到着する。その途中で、ベスツージェフ＝リューミンと合流する。ワシリコーフの守備隊長は、ここで自身の中隊に決起をよびかけた、ソロヴィヨフとシチェピーロを逮捕した。しかし、決起に連帯する兵士たちによって反対に逮捕され、この両名は解放される。そして、ムラヴィヨフ＝アポーストルは、チェルニーゴフ連隊全員の約半数の970名の兵士からなる5中隊を、8将校とともに自分の指揮下にかかえることになる。

12月30日の夜に、ワシリコーフにおいてムラヴィヨフ＝アポーストルは連隊の書記をよびつけ、かれとベスツージェフ＝リューミンの口述を筆記させて、「正教教理問答書」を数冊作成する。これは「教会問答集」をまねて、兵士たちにわかりやすく神・教会・キリスト教徒のつとめを問答形式で記述した文書であり、決起行動へむけて兵士たちの志気をたかめるために利用される。この文書は、聖書にもとづいて専制そして君主制権力一般の適法性を否定し、これらを代議制をとる共和制政府に変革する必要を論証する内容になっていた。ベスツージェフ＝リューミンは、そのほかに、これに類似する一般人民むけの「呼びかけ」文書を作成する。だが、その「扇動的」啓蒙文書は、人民のあいだに普及させる時間的余裕はなかった。

12月31日朝11時に、ムラヴィヨフ＝アポーストルはワシリコーフの中央広場でチェルニーゴフ連隊中隊の閲兵をおこない、行動目的をふくめた演説をおこなう。連隊司祭ダニール・ケイゼルが、みじかい祈りのあと、「教理問答書」をよみあげる。このあとチェルニーゴフ連隊5中隊は、ブルシーロフ方面へむけて出発し、状況におうじてそこからジトミールあるいはキエフにむかう予定をとる。12月31日の夕方にモトウィローフカに到着し、ここで火縄散弾銃連隊第一中隊の一部を併合し、一夜の休憩をとる。よく1826年元旦にビュイストリーツキー・ア・ア中尉がひきいる第二火縄散弾銃中隊も蜂起に合流する。

1826年1月2日朝に、合流を期待したクレメンチューグ連隊はブルシーロフからジミトールへ移動したという情報を、ムラヴィヨフ＝アポーストルは手にする。かれは、第17狙撃兵連隊との合流をもとめて、ベーラヤ・ツェールコヴィへむかう決定をする。だが、その連隊はベーラヤ・ツェールコヴィから移動したとの、斥候兵からの報告がはいる。将兵の志気は低下し、脱走兵がでてくる。さまざまな条件にわざわいされて、統一スラヴ結社の結社員たちによる決起支援の試みもいきづまり、その他有力な南方結社の加盟員たちからも決起を拒絶され、ムラヴィヨフ＝アポーストルは孤立無援の状態におかれる。これらのあいだに、政府軍は蜂起軍にたいする鎮定態勢を着々と強化していく。

1月3日、トリレーサへの行軍の途中で、チェルニーゴフ軍は自分たちにむかって接近してくる騎兵部隊にであう。かれらは、それを自分たちと合流する、結社員ブィハチョーフ・エム・イがひきい

る騎砲兵部隊とみあやまる。ところが、これは2台の大砲をそなえた3個の騎兵中隊からなる政府軍であった。かれらは、いきなり政府軍からの大粒散弾による一斉射撃をうける。かれら決起軍も、勇敢に応戦する。しかし、ムラヴィヨフ＝アポストルが頭部に重傷を負い、指揮官をうしなった決起軍は混乱状態になり、政府軍の散弾攻撃に対抗できずに壊滅する。この様相は、北方結社による決起が元老院広場において、大粒散弾の射撃によって壊滅した状況と類似していた。

北方結社による軍事決起の瓦解の直後に、専制政府はデカブリスト組織の関係者を根こそぎに逮捕する処置をとる。この方針は、南方結社の武装決起における関係者の場合もふくめて、これら南北両結社の活動とは直接に関係をもたない、前・早期デカブリストまでも検挙の対象にした。1825年12月17日に、決起事件をあつかう調査委員会が設置され、ひきつづいて1826年6月1日にはデカブリスト問題だけを特別に処理する、最高刑事裁判所がつくられる。いずれにしても、これらの実質的な主宰者は、ニコラーイⅠ世であった。裁判の名にあたいしない、報復的な秘密裁判の結果は、ニコラーイによる「減刑」をへて、1826年7月上旬すぎまでに最終的に決定をみる。ペーステリ、ルイレーエフ、カホーフスキー、ムラヴィヨフ＝アポストル・エス、ベスツージェフ＝リューミン・エムの5名は絞首刑に指定され、その7月13日に処刑される。それ以外の多数のデカブリストは、シベリア徒刑・その他の自由刑などの処置にさらされる。

デカブリストの決起は、その敗北にもかかわらず、専制側にはげしい恐怖をあたえる。新皇帝ニコラーイⅠ世は、おなじような企図がふたたびくりかえされない保障はない、と確信する。かれは、あたらしい革命運動を事前に阻止するための対策に、さっそくとりかかる。すなわち、かれは1826年1月に、軍官および文官にたいして、いかなる秘密結社およびフリーメイソン組織にも加入しないという誓約書をあらためて提出させ、その4月には革命運動を専門的にとりしめる、悪名だかい皇帝専用の官房をもうけ、警察の捜査を強化させる。さらにその6月10日には、あらゆる自立した思想を排撃する苛酷な検閲規則を公布し、啓蒙の分野にたいする反動的な政策を強行する。

しかしながら、専制の思惑にもかかわらず、デカブリスト運動はロシア革命の序幕にすぎなかったのである。

(未完)

<注>

- 3)のちほど、「デカブリストの妻」の1人として知られるマリーヤ・ウォルコンスカヤ(1805-63)は、ナポレオン戦争のときの英雄ラエーフスキー・エヌ・エヌ(1771-1829)将軍の三女で、このウォルコンスキーの妻である。その長姉エカチェリーナはオルローフ・エム・エフの妻であり、また父方のおじがダヴィードフ・ヴェ・エリである。2人の兄ラエーフスキー・ア・エヌ(1795-1868、退役陸軍大佐)とエヌ・エヌ(1801-43、陸軍大佐)もデカブリストである。そのほかのデカブリストの場合もふくめて、職域・友人関係以外に、親類・フリーメイソン関係が、デカブリスト運動の基底的な人脈になっていた。

<引用・参考文献>

19. Принцева, Г. А. Декабристы в изобразительном искусстве. М., Искусство, 1990.
20. РАН ИРИ 14 декабря 1825 года и его истолкователи. М., Наука, 1994.
21. Троицкий, Н. А. Лекции по русской истории XIX века. Саратов, 1994.
22. Мироненко, С. В. Страницы тайной истории самодержавия. М., Мысль, 1990.
23. Плимак, Е. Г., Хорос, В. Г. Проблемы декабристского движения. // Вопросы философии. 1985. №12.

24. Матковская, И. Я. К характеристике социально-этических идей декабризма. // вопросы философии. 1975. №12.
25. Эштут, С. А. Великая Французская революция и нравственные искания декабристов. // Философские науки. 1990. №1.
26. Писатели-декабристы в воспоминаниях современников. Т. 1-2. М. Худож. лит., 1980.
27. Мемуары декабристов. М., Правда, 1988.
28. Политическая ссылка в Сибири XIX-начало XX в. М., Наука, 1987.
29. Н. И. Лорер-записки декабриста-. Иркутск, 1984.
30. Пасецкий, В. М., Пасецкая-Кремнинская, Е. К. Декабристы-естествоиспытатели. М., Наука, 1989.
31. Дневник Павла Пущина/1812-1814. Изд. ЛГУ., 1989
32. Эйдельман Н. Первый декабрист. М., Политиздат, 1990.
33. Лунин, М. С. Письма из Сибири. М., Наука, 1987.
34. Миронова, И. А. Декабрист Иван Лмитриевич Якушкин. М., Просвещение, 1987.
35. Декабрист М. А. Фонвизин //Замалеев, А. Ф. Лепты: Исследования по русской Философии. СПб, 1996.
36. Памяти декабристов. Т. 1-3. Л., Изд. АН СССР, 1926. (Nauka, Xerox)
37. 鈴木淳一訳『M.Nウォルコンスカヤ回想録』. //『えうゐーロシアの文学・思想-』, №25. 26. 27-28. 北海道大学ロシア文学研究室, 響文社.
38. Секиринский, С. С., Филиппова, Т. А. Родсловная российской свободы. М., Высш. шк., 1993.
39. Щёголев, П. Е. Первенцы русской свободы. М., Современник., 1987.
40. Эштут., С. А. В поиске исторической альтернативы. (Александр I. Его сподвижники. Декабристы) М., Россия молодая, 1994.
41. Материалы по истории СССР. Освободительное движение и общественная мысль в России XIX в. М., Высш. шк., 1991.
42. Матковская, И. Я. Проблемы развития прогрессивной этической мысли России. М., Высш. шк., 1990.

